

氏名	星野文子
学位の種類	博士(学術)
学位記番号	甲第174号
学位授与年月日	2013年6月28日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	ヨネ・ノグチという文化現象：名声の軌跡 (Yone Noguchi as a Cultural Event: The Trajectory of His Fame)
論文審査委員	主査 教授 大西直樹 副査 名誉教授 亀井俊介(東京大学) 副査 献学60周年記念教授 スティール M. ウィリアム 副査 教授 岩切正一郎 副査 教授 ツベタナ クリステワ

論文内容の要約

本論文は、1893年、17歳で単身渡米し、英語での詩作品の出版をとおして生前には海外で名が知られ、帰国した後も国際的知名度を背景に国内でも著名でありながら、他界後は殆ど忘れさらられてきたヨネ・ノグチ(野口米次郎、1875-1947)という詩人の業績と生涯を文化現象、あるいは名声の調査という視点から考察するものである。

言うまでもなくヨネ・ノグチは、世界的に著名な彫刻家イサム・ノグチの父であり、自身国際的に活躍し、日本人として初めてアメリカやイギリスで英語の詩集を出版し、両国の多くの詩人と個人的交流を深めた希有な国際的経歴を持った詩人である。生前には英米ばかりか日本においても驚くほどに著名であったヨネ・ノグチが何故、没後見事に忘れられてきたかという点が一つのナゾとして浮かび上がる。本論文は、そのようなヨネ・ノグチを文化現象として捉え、彼の神話化されたともいえる名声とその軌跡の分析をおこなうもので、どのような時代背景で、どのような要素が注目され、ノグチの名が知られるようになったか、なぜ日本社会に収まり切れていない一面もありつつ日本で著名であったかなどを、五つの視点から分析している。

第1章では、アメリカでの執筆を通して作られた名声の調査にあてられている。ノ

グチが刊行した英詩集と英語による小説は共にアメリカにおける日本人初の作品であった。それを可能にしたのはノグチ個人の努力だけではなく、彼の執筆活動を支えたアメリカ人関係者の貢献があったため、その実情を浮き彫りにした。当時広く知られていたホイットマンの詩や、ジャポニズムへの関心など、ノグチがその時代の特徴を掴んで活動しようとしていた姿勢に注目しながら、ノグチのアメリカにおける知名度の広がりを確認する。

第2章では、さらなる詩人としての活躍を求めてノグチがロンドンで出版した英詩集の評価を詳細に検討している。ロンドンにおいても、日本人初の英詩集であり、ノグチの作品の表すエキゾティシズムへの評価、1902年の日英同盟締結などの社会背景なども踏まえ、彼の作品に集まった注目の意味を再検証している。同時に、第1章と第2章では、ノグチの英語は英語母語話者による編集を経て初めて出版に堪えうるレベルになっている点を、残された手紙などから明らかにし、彼が作品に表したエキゾティシズムがいかにアメリカ人によって作られたものであったかも浮き彫りにしている。

第3章では、ノグチと夏目漱石を、その海外経験という側面から比較検討した。1902年実際には8日間とはいえ滞英時が重なる時期にロンドンに滞在したノグチと漱石だが、文部省から派遣された漱石と独自に自費で海外へ出たノグチの渡航条件の違い、滞英中の日本との繋がりや、現地社会への適応の度合いなどの側面から比較を行っている。また、ノグチは現地社会に深く入り込もうとしたため帰国後の日本でも「エトランゼ」という意識が抜け切れなかったが、この意識のあり方も漱石とは異なる点である。

第4章は、今日は詩人として殆ど忘れられているノグチと、彼より19歳年下で詩人として知名度を保つ西脇順三郎という、多くの共通点を持つ二人の違いである。時代背景の違いを踏まえながら、その共通点であるロンドンでの英詩集の自費出版や、帰国後の日本語詩集の出版、ヨーロッパでのイマジズムやモダニズムの動きの受け止め方、慶應義塾という共通の場でのあり方などの観点から、当時に限らずその後に至るまでの評価を決めた二人の時代の受け取り方に光をあてている。

第5章では、戦争時のノグチの言動に焦点をあてている。ノグチの生涯を見ると、日清・日露戦争、第一次および第二次世界大戦が勃発した。ノグチは、平和時には日本と西洋の狭間に立っていられたものの、戦争時は国粹主義と国際性のどちらかを選ばねばならなかった。著名であるが故に自らの立場を公にした彼の言動を網羅的に調査し、敵国アメリカに鋭い批判を展開したノグチの当時の知名度を再確認している。

本論文では、この5つの観点からノグチが生前に持った知名度の実態に迫り、いか

に特有な時代背景、社会背景の中で知られた人物であったかを浮き彫りにしている。そして、特有の時代に名を馳せたノグチを文化現象と位置づけることで、ノグチの没後に忘れられている理由の一つが時代の変化にあるという点がおのずと示されている。ノグチのように西洋と東洋の狭間でジェネラリストが第一線に出る時代は過ぎ、戦後、つまりノグチが他界した頃からは、国際性という視野が強調され、日本と欧米それぞれに関する専門知識は細分化され、極められてきたのである。当時、ノグチが彼独自の役割を見極め果たしていた点は、今日においても評価されるべきであろう。ノグチの英語は習得した言語という域を出なかった。にもかかわらず欧米でノグチが注目されたのは、彼の文学作品のもつエキゾティシズムや、「文化大使」としての発信が注目された時代だったからであると思われる。ノグチは、その時代の限界の中で名声を築くこと成功した人物であった。そして、近年ヨネ・ノグチが再び注目されはじめているのも時代の変化であるといえよう。ノグチが自らを「エトランゼ」や「二重国籍者」と呼んだような二つ以上の国や文化にまたがる人生を生き、似たような立場に共感し、理解する人が増えた。それに伴い、異文化コミュニケーションや異文化間適応などの学問も発達し、ノグチのように、どの分野にも収まり切れなかった人物の研究がなされるようになったのも、グローバル化が進んだ現代を象徴する文化現象だといえる。

論文審査結果の要旨

星野文子氏の最終審査は、博士論文審査委員会により、2013年5月29日（水）午後1時50分から3時まで、国際基督教大学教育研究棟257号室において、大学院教員および院生に公開で行われた。

最近、博士論文や研究書のあいつぐ出版によって、日米でにわかに注目を集めつつあるヨネ・ノグチであるが、彼に関する資料は日米英の様々な場所に所蔵されており、未発掘のものも多い中で、本論文の著者は多岐にわたる資料の収集に奔走し、国内外の貴重な一次資料、および彼の言動をおさめた二次資料に光を当てて論文を構成したことがまず高く評価できる。しかも、ヨネ・ノグチという特異な人物を評伝として単なる時系列的に彼の生涯と業績を追ったのではなく、まったく独自の視点でその特異性のあり方を浮き彫りにし、それを文化現象として客観的に分析したことが、この論文のユニークな特徴といえるだろう。たとえば、サンフランシスコに始まる人的交流の中で浮かびあがる彼の個性、アメリカにおけるウァキーン・ミラー、イギリスにおけるマイケル・ロセッティなどの著名詩人たちとの親しい交流、ロンドンにおける夏目漱石との留学体験の比較、慶應義塾での後輩にあたる西脇順三郎との比較対照、日本の文壇における彼の評価、インドの詩人タゴールとの論争、さらに第二次世界大戦という問題によって追いつめられた彼の自己理解のあり方、などを、しっかりとした資料的裏付けによって客観的かつ実証的に立論した点は、これまでのヨネ・ノグチ理解を大きく拡張しかつ深化させたことは間違いなく、高く評価すべき業績である。アメリカ、イギリス、そして母国日本への回帰と揺れ動くヨネ・ノグチの心情変化を、ツベタナ・クリステワ教授は行方知らずの「浮き雲」ではなく、どこかの岸辺に近づこうとする「浮き草」のようだと彼の生き様を評し興味深い点を指摘したが、これまで忘却されていたものの、最近のグローバルな文化の展開によって初めて彼の人と業績を理解し評価できる環境が整ったとも言えるのかもしれない。その意味で文化の狭間に落ち込んだ人物に新たな光を当てたこと自体、きわめて興味深い研究だと評価できる。特筆すべきは、亀井俊介教授が指摘していたように、この論文の文体が、若干の不自然さもありながら、平易で明確であり、この種の論文のありがちな学術論文のかた苦しきから自由な点が本論文の特質として指摘されていた。

たしかに、ウィリアム・スティール教授が指摘したように文化現象という視点は曖昧さがつきまとい、名声調査も、その方向性が何を求めるのか方法としての弱点をもっていることは否めない。また、夏目漱石や西脇順三郎との比較についても、それぞれ

がきわめて興味深い対照的な対比、例えば官費留学と私費留学、英文学とアメリカ文学、など鮮やかなコントラストを示していることはたしかだが、漱石と西脇の英詩とノグチのそれとの比較が含まれていない点は、亀井教授の指摘を受けたように惜しまれる盲点となっている。さらに、岩切正一郎教授には、西脇順三郎との比較において、文化資本の違いという観点を補足する可能性も指摘された。また、主査の大西直樹は、彼の詩の質についての評価、エズラ・パウンドへの影響などの点において一段と踏み込んだ議論がもとめられると指摘した。そういったいくつかの弱点はあるにしても、総じて本論文が博士論文としての十分な学問的要件を備えている点については審査委員全員が合意し、高い評点で合格の評価を与えた。